新参者

東野圭吾

講談社文庫

講談社文庫

常州大学図書館
藏書章

新参者

東野圭吾

講談社

|著者| 東野圭吾　1958年、大阪府生まれ。大阪府立大学電気工学科卒業後、生産技術エンジニアとして会社勤めの傍ら、ミステリーを執筆。1985年『放課後』（講談社文庫）で第31回江戸川乱歩賞を受賞、専業作家に。1999年『秘密』（文春文庫）で第52回日本推理作家協会賞、2006年『容疑者Xの献身』（文春文庫）で第134回直木賞、第6回本格ミステリ大賞を受賞。本書は「加賀シリーズ」8作目であり、最新作は『麒麟の翼』（講談社）。近著に『虚像の道化師』『禁断の魔術』（ともに文藝春秋）、『夢幻花』（PHP研究所）などがある。

新参者（しんざんもの）
東野圭吾（ひがしのけいご）
© Keigo Higashino 2013
2013年8月9日第1刷発行
2013年8月9日第2刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———凸版印刷株式会社
製本———株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277628-8

目次

第一章　煎餅屋の娘　……7
第二章　料亭の小僧　……49
第三章　瀬戸物屋の嫁　……91
第四章　時計屋の犬　……129
第五章　洋菓子屋の店員　……169
第六章　翻訳家の友　……215
第七章　清掃屋の社長　……255
第八章　民芸品屋の客　……299
第九章　日本橋の刑事　……339

講談社文庫

新参者

東野圭吾

講談社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一章　煎餅屋の娘　……7
第二章　料亭の小僧　……49
第三章　瀬戸物屋の嫁　……91
第四章　時計屋の犬　……129
第五章　洋菓子屋の店員　……169
第六章　翻訳家の友　……215
第七章　清掃屋の社長　……255
第八章　民芸品屋の客　……299
第九章　日本橋の刑事　……339

新参者

第一章　煎餅屋の娘

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

「ようやく涼しくなってきたみたいだよ。やれやれだ。まだ六月だっていうのにねえ」

店頭に出してある煎餅の袋を並べ直して、聡子が店に入ってきた。

「おばあちゃんさあ、退院したばっかなんだから、そんなに動き回ってちゃだめだよ。そういうとこ見られると、あたしがおとうさんから文句いわれるんだよね」菜穂は顔をしかめる。

「大丈夫、大丈夫。退院したってことは、もう病人じゃないってことなんだから、ふつうに働かないとね。働かざる者食うべからず――昔からそういうんだよ。菜穂ちゃんも、早く自分の力で食べられるようにならないとね」

「ちぇっ、またそれだよ」菜穂はマヨネーズ入り煎餅のかけらを口に放り込んだ。

聡子は腰を叩きながら、孫娘の顔をしげしげと眺める。

「あんた、それにしても煎餅が好きだねえ。いくら煎餅屋の娘だからって、生まれて

からずっと食べてて、よく飽きないもんだね」
「だってこれ、新製品だよ」
「いくら新製品たって、煎餅は煎餅だろ。わたしゃはっきりいって、もう見るのもいやだね。第一、歯が保たないよ」
「そんなんで、よく五十年も煎餅屋が続けられたね」
「何度もいうようだけど、煎餅屋になったのは三十年前。その前は和菓子屋。それをあんたのとうさんが、勝手に煎餅屋にしちゃったの。あーあ、羊羹が懐かしい」
「食ってるじゃん、羊羹だってしょっちゅう」
菜穂が口を尖らせていった時、ガラスドアを押して、グレイのスーツを着た小太りの男が入ってきた。
「どうも、こんにちは」威勢良く挨拶し、頭を下げた。
「田倉さん、悪いわねえ、わざわざ。しかもこんな暑い中」聡子が声のトーンを上げる。
「いや、これが仕事ですから。それに夕方になって、ずいぶんと涼しくなってきました。昼間は参りましたけど」
「それじゃあさぞかし疲れてるでしょうに。今、何か冷たいものでも入れますから、中に入ってちょうだい」聡子は店の奥に招こうとした。奥は居室になっている。

「いえ、こちらで結構です。今日はあれさえいただければ」そういって田倉は指先で空中に四角を描いた。

「診断書ね。大丈夫、今日、この子と二人でもらってきたから。私は一人で大丈夫だっていったんだけど、ついてくるといってきかなくてね」聡子はサンダルを脱ぎかけた。

「いいよ、おばあちゃん、あたしが取ってくるよ」菜穂は祖母を押し留め、自分が奥に進んだ。

「どこにあるかわかってるの？」後ろから聡子が訊く。

「わかってるよ。あたしがしまったんだから。自分こそ、どこにあるかわかんないくせに」

菜穂の言葉に対して聡子は何かいったらしい。田倉の笑い声が聞こえてくる。

「菜穂ちゃん、お茶もねー」聡子の声が響いた。

「わかってる」うるせーな、と舌打ちしながら菜穂は呟いた。

冷えたウーロン茶をトレイに載せて、菜穂は店に戻った。二人は和やかに会話を続けている。

「それにしても元気になられましたよ。前に伺ったのは、たしか四日前ですよね。たったそれだけなのに、顔色なんか全然違う」田倉が感嘆の声をあげ、首を横に振っ

た。

「やっぱりねえ、家に帰ると気分が違うから。なんか、じっとしていられなくてね。この子なんか、うろうろ動き回るなってうるさいのなんの」

「いやあ、それはやっぱり御心配でしょうから。――あ、どうも、いただきます」田倉はウーロン茶の入ったグラスに手を伸ばした。

「おばあちゃん、これ」菜穂は封筒を聡子に渡した。

「はい、ありがとう」聡子は封筒の中から一枚の書類を出し、さっと目を通してから、田倉のほうに差し出した。「田倉さん、これでいいのかしら」

ちょっと拝見、といって彼はそれを受け取った。

「ははあ、二ヵ月も入院されてたんですか。そいつあ大変でしたねえ」

「それで肝心（かんじん）の病気が治ったっていうんならいいんだけど、結局何もしてもらえなかったんだから情けないでしょ。反対に別の病気が見つかって、それを治療するのに二ヵ月もかかってたのよ。悔しいったらないわね」

「胆管炎、となってますな。あ、でも、動脈瘤（どうみゃくりゅう）の検査とも書いてあります」

「その動脈瘤のほうが肝心なのよ。それを手術するつもりだったのにねえ。結局、そっちのほうは後回し」

「すると、動脈瘤の手術もいずれは？」

「そういうことになるみたい。でもねえ、もうこの歳だし、下手に手術なんかするより、このまま行けるところまで行ってやろうかって気にもなってんのよ」

「ははあ、なるほどねえ。難しいところなんでしょうなあ」無責任なことはいえない状況で、田倉は少し困っている様子だ。

「書類、それで大丈夫？」聡子が訊いた。

「はい、先日いただいた分と合わせて、これで全部揃いました。これから会社に行って、すぐに手続きします。遅くとも来月には入院給付金が支払われるはずです」

「これから会社に？　大変ねえ」

「いえいえとんでもない。じゃあ、私はこれで」書類を鞄に入れると、田倉は菜穂にも笑いかけてきた。「どうもごちそうさまでした」

ありがとうございました、と菜穂は礼をいった。

田倉が出ていくのを聡子は追いかけた。そして彼が立ち去るのを、店の前で見送っていた。

聡子の息子、つまり菜穂の父親である文孝が帰ってきたのは、それから二時間ほどしてからだった。白いポロシャツの襟首が汚れている。彼は今まで、問屋に行っていたということだった。

「小伝馬町で何かあったみたいだな」靴を脱ぎながら彼はいった。「パトカーがずい

ぶん止まってた。交通事故とかでもないみたいだった」
「事件かな」菜穂はいってみた。
「そりゃそうだろ。警察が来てるんだから」
「このあたりも物騒になったねえ」台所で味噌汁の味見をしていた聡子がいう。「やっぱり人が増えすぎてるんだよ。マンション、建ちすぎだからねえ」
文孝は何もいわずにテレビのナイター中継にチャンネルを合わせる。菜穂は食器を並べることに専念した。マンションが増えて新しい住民が増えると悪い人間も増える――これは聡子の口癖のようなものだ。
上川家では、三人揃わないと夕食を始めないのが約束事になっている。文孝が外出していたので、今夜はいつもより遅い夕食となった。
つい先日までは菜穂が夕食の支度をしていたが、一週間前からは聡子がしてくれるようになった。彼女が入院する前に戻ったわけだ。
菜穂の母は、彼女がまだ小学校に入る前に亡くなった。交通事故だった。幼かったが、その時の衝撃と悲しみは、今も菜穂の心から離れていない。救いは、家が商売をしているおかげで、昼間も父親がそばにいてくれたことだ。さらには、聡子がいてくれたことだ。彼等のおかげで、少なくとも父子家庭の子供が宿命的に背負わねばならない孤独感からはずいぶんと逃れられたと思う。母親の愛には飢えたが、心のこもっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com